

エレミヤ書 14 章 7-10、19-22 節

テモテへの手紙 二 4 章 6-8、16-18 節

ルカによる福音書 18 章 9-14 節

本日の旧約日課は、「エレミヤ書」です。1 節から 6 節は《》にはいっており、11 節から 18 節は省略されていますが、その部分にも少し触れます。14 章 1 節に「干ばつに見舞われたとき、主の言葉がエレミヤに臨んだ」とあります。本日の箇所は、主なる神様が、干ばつという自然現象の中で語られたのです。

『聖書(旧約)』において、雨は主なる神様の恵みです。単なる自然現象ではなく、主なる神様と人間との関係を示す事柄でもあります。また、雨は主なる神様の人間への恵みであることが前提となっています。しかし、雨が降らないことにも意味があります。なぜならば、雨が降らないことを通して、自分たちと主なる神様との関係について何かが示されるからです。

2 節には、「ユダは渴き、町々の城門は衰える。人々は地に伏して嘆き、エルサレムは叫びをあげる」とあり、雨が降らないことへの嘆きがあります。水が豊かな日本でも、雨が少ないときに水不足が話題となりますが、乾燥したイスラエル、ことに南のエルサレム近辺では、秋から冬に、少ししか雨が降りません。また水源となる川も少ないですから、干ばつは生活に大きな影響を与える重大な問題です。ここで触れられている干ばつが、いつの出来事であるかを確認することはできませんが、その干ばつという自然現象から、預言者エレミヤは、「我々の罪が我々自身を告発しています。主よ、御名にふさわしく行ってください。我々の背信は大きく、あなたに対して罪を犯しました。」(14:7) と述べ、イスラエルの罪を見出します。

エレミヤが「我々」と語る人々は、南のユダ王国の人々です。エレミヤが活動した時代は、北のイスラエル王国はすでに滅んでいました。そして南のユダ王国も決して安泰ではありませんでした。北には、勢力を拡大しつつある新バビロン帝国があり、南には、強大なエジプトが絶えずイスラエルに干渉し、脅威を与えていました。神の王国は、大国の間に挟まれて、危機的状況の中にあっただけです。また、国内もエレミヤが語る通り、正義が行われているとは言えない状況でした。エレミヤは、干ばつという自然現象から、自分たちの王国の内外にかかわる状況を理解したのでした。

ただし、ユダ国内で正義が行われていないという状況は、単に主なる神から離れているということではありませんでした。異教のバアル信仰に人々が傾倒した時もありましたが、エレミヤの時代は、律法が新たに神殿から発見され、申命記改革という、新しい宗教的な運動があり、律法に基づき、正しいことを行うことを実践していた時でもありました。「我々は賢者といわ

れる者で、主の律法を持っている」と8章8節にある通り、律法があるから大丈夫である、主なる神様は救ってくださる、そのような安心感が存在する状況でもありました。預言者（偽）たちも自分たちの考えを、主なる神様の言葉として、平和を語っていました。本日の聖書日課では省略されていますが、王国の人々は、主なる神様に祈り、神殿祭儀を行い、預言者たちは言葉を語っていたのです。そして、エレミヤは、そのよう預言者（偽）たちとその言葉に耳を傾けるイスラエルの人々に対して、彼らが剣と飢饉で滅びるといふ厳しい言葉を、主なる神様から語るようにと預かります（エレ14:11-16）。ここに、預言者であると同時に、イスラエルのひとり人間・信仰者でもあるエレミヤの、大きな苦悩があったのです。

エレミヤは、律法に基づいた申命記改革には賛成です。エレミヤが批判したのは、律法を表面的に守ること、あるいは律法を保持しているから大丈夫であると考えてしまうことでした。また、大国間の政治状況を見て下した人間的判断を、主なる神様の意思として語り、また受け止めることでした。もちろん、エレミヤ自身は、自分の民イスラエルの滅びも望んでいません。だからこそ、「**イスラエルの希望、苦難のときの救い主よ。なぜあなたは、この地に身を寄せている人、宿を求める旅人のようになっておられるのか。なぜあなたは、とまどい、人を救えない勇士のようになっておられるのか。**」

（14:8-9）と主なる神様に対して、嘆きの言葉を投げつつも、イスラエルの民が立ち返ることを望んでいるのです。

エレミヤは、イスラエル・南ユダ王国、すなわち神の王国が、新バビロニア帝国によって滅ぼされる時期に活動していたわけですから、イスラエルの歴史から考えて、非常に困難な時期に活動していたといえます。イスラエルの人々が、まったく主なる神様を信じなくなり、ほかの神々を信じるようになり、滅亡が起こったのであれば、わかりやすいのですが、それほど単純ではありません。主なる神様ではなく、ほかの神々を信じる人々もいた一方で、自分たちは律法に基づいて、主なる神様に従っているから大丈夫だという人々もいたのです。イスラエルの人々のそのような混乱は、国際的な政治状況の変化、大国に挟まれているという政治的軍事的緊張感の中から生まれたものであったのでしょうか。その意味では、仕方がないことかもしれません。その時代の当事者にとっては、今の出来事に対する正確な判断は困難であるからです。それゆえに、エレミヤの苦悩も嘆きにも深いものがあったと思います。

いつの時代の人も同じですが、今起きていることについて、それが未来にどのように関係するのか、正確に理解することはできません。ことに、大国間が行き交うスクランブル交差点のような場所に位置し、しかも勢力的にも極めて小国であるイスラエルについては、現代で何が一番良い選択であったかを理解することは難しいと思います。だからこそ、歴史から学ぶことは大切だ、そうでなければ未来への視点がなくなると一般的に言われますが、そ

のような主張も、『聖書』的に考えれば、すなわち主なる神様の視点からいえば正しいとは言えません。歴史記述とは人間が創作するものですから、捏造された歴史記述からの学びは、正しい判断を妨げるからです。

聖書日課を超えますが、エレミヤは、そのような不安と混乱の中、預言者として主なる神様から、非常に厳しい言葉を預かったのです。14章17から18節に「あなたは彼らにこの言葉を語りなさい。『わたしの目は夜も昼も涙を流し、とどまることがない。娘なるわが民は破滅し、その傷はあまりにも重い。野に出て見れば、見よ、剣に刺された者。町に入って見れば、見よ、飢えに苦しむ者。預言者も祭司も見知らぬ地にさまよって行く』」とあります。このような言葉を自分の同胞に語らなければならなかったのです。

エレミヤは個人としては、このようなことが起こらないようにという願いはあったと思います。しかし、今のイスラエルの在り方が、主なる神様の御心にかなうものではないことを知っているエレミヤは、この言葉を語るしかなかったのです。預言者(仮)たちのように語ることはできなかったのです。

これらのことを経て、本日の聖書日課の箇所となります。21節以下でエレミヤは、預言者である当時に、王国の一人、イスラエルのひとり人間・信仰者として、「我々を見捨てないでください。あなたの栄光の座を軽んじないでください。御名にふさわしく、我々と結んだ契約を心に留め、それを破らないでください。国々の空しい神々の中に、雨を降らしうるものがあるでしょうか。天が雨を与えるでしょうか。我々の神、主よ。それをなしうるのはあなただけではありませんか。我々はあなたを待ち望みます。あなたこそ、すべてを成し遂げる方です」と語ります。干ばつという自然現象から与えられた預言の言葉であるからでしょう。主なる神様だからこそ、雨を降らせる、イスラエルを救う方であると確信し、イスラエルの一人として主なる神様への信頼に立ち返ることを訴えます。ただし、エレミヤの苦悩は終わることなく、15章以降もエレミヤの嘆きは続きます。そして、このエレミヤの切なる訴えへの主なる神様の答えは、王国の滅亡とバビロン捕囚という出来事でした。主なる神様は、王国を滅亡という事柄を超えて、残りの者が、新たに歩み始めるということへと、イスラエルを導いたのでした。

福音書の物語は、引き続きイエス様の譬え話です。物語の構造自体は非常に単純かつ明瞭です。語り手は、最初に、「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対しても、イエスは次のたとえを話された」(18:9)と価値判断をもって、イエス様が譬え話をする目的を書いています。先ほどのエレミヤ書で、申命記改革を経て、自分たちは律法を保持しているから大丈夫だと考える人々への批判にも通じる説明です。

イエス様の譬えでは、宗教的・倫理的に真面目なファリサイ派の人々と、宗教的・倫理的に軽蔑されていた徴税人とを比較し、どちらが義とされたかについて、逆説的な事柄が語られています。最後になぜそのような逆転が起こったかについて、「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高めら

れる」という、主なる神様への謙虚さを求めるイエス様の言葉で、物語全体が締めくくられています。

物語の細部を見てみますと、「正しい人間だとうぬぼれて」と訳されている部分の「正しさ」とは、単純に良い悪いではなく法律に照らした「正しさ」「義とされた」状態です。「うぬぼれて」とある部分は、「自覚している」状態です。言い換えれば、「法律的に考えて、自分は悪いことをしていない、義であると自覚している人々」です。実際、ファリサイ派の人は、「してはならない」ことすべてをしっかりと守っていました。それだけではなく、「週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています」と、どちらかといえば「しなければならないこと」をも守り、また「したほうがよいこと」をも積極的に守っていたのです。

キリスト教では伝統的にファリサイ派という言葉をも、「偽善者」のように扱うことが多くありますが、この人々は決してそのような人々ではありません。彼らはユダヤ教の律法に基づき宗教的・倫理的に正しいことを実践している人たちです。またその点で尊敬されていた人々です。唯一欠点があるとすれば、そのような「義」である自分たちと、律法を守れない「不義」なる人たちとを明確に区分してしまうことです。そして、この区分が差別になってしまうとき問題となります。なぜ律法を守るのかということにかかわるからです。

律法について正しい認識と実行、そしてイエス様の語る主なる神様への謙虚さ、それらがあれば、イエス様の時代から見て、約500年前の王国の破滅という出来事を防ぐことができたのか？そのような問いは、過去の歴史に対する仮定ですから、あまり意味はないかもしれません。しかし、教会に集められるわたしたちにとって、単純に律法を信仰と置き換えてもいけないのですが、あえてそうした時に、わたしたちがなぜ教会で信仰を持ち続けるのか、またわたしたちは主なる神様に対して本当に謙虚であるのか、その問いは大切であると思います。

教会が誕生したのちの二千年の人類の歩みにおいて、様々な争いや戦いの出来事がある、それに伴う嘆きと悲しみがある、今もそれが存在し、それがまた世界に広がる可能性もある、その現代は、すべての教会において、その信仰の在り方に対する問いかけと謙虚さの不足への指摘があることを示しているのだと思います。わたしたち一人ひとり信仰、そしてわたしたちが集まる東京聖三一教会、そこでの歩みは、世界全体からいえば小さい事柄です。しかし、主なる神様が見守ってくださっている、全世界的な事柄にかかわっているのです。そして、イエス様の十字架と復活は、この世界の失敗あるいは死が終わりではないことを示してくださっています。その主イエス・キリストを通して、主なる神様を信頼しながら、ご一緒に歩みたいと思います。そして、教会を通して、何が本当の平和につながる道なのかを示していきたいと思います。